

いなかおカ VIII



2002 No.144

東京都世田谷区歯科医師会会報
<http://www.setagaya-da.or.jp/>



東南アジア旅行の知的楽しみ方

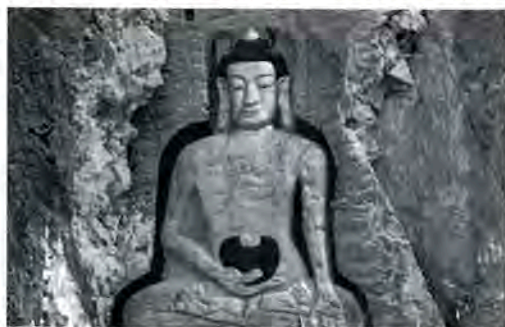
「インド化」された国々へ 遺跡の旅—XVI

下馬部会 斎藤 賢一

今回はチベットの仏教寺院を訪れたいと思います。チベット文化圏は広く、中国のチベット自治区とその周辺、北インドのラダック地方、ネパール、ブータン等がそうです。この中で1988年に旅行したチベット自治区と1991年に旅行したラダック地方の仏教寺院のお話をいたします。チベット仏教はラマ教と言われ、日本人にはあまり馴染みがないと思われませんが、日本と同じ大乘仏教から発達し、インドでヒンドゥー教の神々を取り込み、密教となったものが、チベットで発展したものです。したがって空海によって日本に伝えられた密教とは兄弟のようなものです。しかし男女神の交合像（ヤブユム像）、黄金や極彩色の巨大な仏像、恐ろしい顔の忿怒像、また壁面すべてに描かれた仏画（タンカ）や曼陀羅、薄暗い寺院内部にただようバターで作った灯明の臭い等、日本の寺院とのあまりの違いに驚かれるでしょう。お祈りの仕方も、五体投地といって、手足を投げ出して地面にひれ伏し、全身全霊を仏の前に投げ出す最高の礼法で、日本では僧侶が最も重要な儀式の時にのみ行われるもので、チベット人の信仰心の篤さにも驚かれるでしょう。

1988年はまだ個人旅行が一般化されず、前年のラサにおけるチベット独立のデモで、死傷者がでたため、中国政府もなかなかビザの発行をいたしませんでしたので、25名ほどの団体旅行でチベット自治区の主都ラサへ出発しました。まず香港で一泊し、中国四川省の主都成都へ、ここで更に一泊し、いよいよ3600mのラサへ2時間のフライトです。ラサのクンガ空港は山に囲まれた谷間にコンクリートの滑走路があるだけで、普段は地元の人たちがヤギやヒツジを連れて横断しています。飛行機を降りても別段、空気の薄さに気づくわけでもなく、機内で配られたケーキの入ったビニール袋がパンパンになっ

ているので、高度と気圧の違いがわかります。バスに乗り、ヤルツァンボ河に沿ってラサに向かう途中、岩壁に色彩をほどこした大きな「ネタン大仏」が現れ、いよいよチベット仏教世界へ入ったと気持ちが高ぶります（写-1）。ホ



写-1「ネタン大仏」

テルにチェックインし、その日は高度順応のため休息をとる予定でしたが、とても部屋でじっとしてられなく、妻と散歩にでて、ノルブリンカ（ダライラマの夏の離宮）へ行くと、丁度お祭りが行われていたので見学し、さらに町中を歩き回ってしまいました。その結果は夜にでました。初めての高山病です。頭が割れるような頭痛、ひどい悪寒、吐き気、呼吸の苦しさ等の症状がではじめ、部屋のベッドには酸素と書いてあるビニールチューブが壁から配管されていますが、いくら吸っても症状は変わらず、おそらくただの空気が入っていたのではないかと思います。とても不安でしたがひたすら耐えしのぎました。食事は毎食ホテルのレストランで全員そろって食べますが、初日の夕食は私を含めて4、5人がパスし、翌日の夕食は更に10人ぐらいの人がパス、次の日の朝食は食べに来た人がなんとガイドを含めて2人（その内の一人は妻）しかおりませんでした。高山病でふらふらしながらも寺院見学は行いま

最初の見学は市街地の北にある、岩のごろごろとした禿げ山にあるセラ寺です(写-2、3)。ラサ三大寺の一つで、仏教大学の役割を果たしていました。以前は4つ学堂がありました、いまは3つの学堂と各々の集会堂、僧舎からなります。僧徒は6、7千人いましたが、現在は3百名ほどの僧徒が在住しているとのことですが、私達が訪れたときはほとんど人影がまばらで、ひっそりとしていました。これは文化大革命による中国全土のしかも5000mをこえるヒマラヤの奥地まで行われた、仏教寺院の破壊と僧侶の虐待によるものです。自分たちの祖先が作り上げた文化遺産を自分達の手で破壊するという行為は、この文化大革命はもとより、それをまねたカンボジアのクメールルージュ(ポルポト派)、明治政府の廃仏毀釈、最近ではアフガニスタンのタリバーンによるパーミヤン大仏を始めとする仏像破壊等、人間のあさはかさ、断腸の思いがします。

話はそれましたがセラ寺は明治時代の終わりに、川口慧海が日本から密入国して、仏教を学んだ場所で、その波瀾に富んだ冒険(求法の旅)



写2「セラ寺」



写3「セラ寺堂内」

は「チベット旅行記—講談社学術文庫」をぜひご一読下さい。外国からも大変評価され、今回の旅行もチベット仏教を見てみたいことと、同時に「チベット旅行記」の世界を体験してみたくて参加いたしました。

次はラサ市街の北西にあるデブン寺を見学したいと思います(写-4)。ここもセラ寺同様、



写4「デブン寺」

岩のごろごろした山の斜面に建つ壮大な寺院で、山全体が白い建物でおおわれる世界でもまれな大僧院です。ここも以前には1万人を越える僧徒が居住していましたが現在は3百人以下です。斜面に建っているのここを見学する為にはすべて階段を登らなければならず、また僧房が沢山あり迷路の様になっています。高山病の体にとってはとてもつらく、数段登ると息切れがしてなかなか登れません。ここは7つの学堂がありました、今は4学堂と集会堂それに全体の大集会堂があります。この僧院の特徴はモンゴル系の僧徒が全体の三分の二も学んでいたことです。

ここでチベット仏教の諸尊のお話をいたします。日本では見かけない沢山の仏、神、高僧が暗い寺院内に祀られていますが、そこにはある一定の体系があります。それらは祖師、仏、守護尊、菩薩、護法尊に分類されます。祖師はインドやチベットで活躍した高僧で、チベットでは師(ラマ)を重視しますので、この分類ではトップに位置します(写-5)。チベットに密教を導入したパドマ・サンバヴァ、ゲルク派(チベット仏教の宗派の中で一番大きい)の開祖ツォンカパは像やタンカ(仏画)に無数に描かれています。仏では全身黄金で、トルコ石や



写5「祖師」

ラピスラズリー等で装飾された釈迦、薬師、弥勒、無量寿などが崇拜されています。守護尊は後期インド密教の神々でトラやゾウの皮、生首、ドクロ等で身を飾り、多面多臂でほとんどの場合配偶神と交合するという異様なスタイルで像や壁画として至る所に祀られています(写-6)。カーラチャクラ、ヴァジュラバイラヴァ、グヒヤサマージャ、ヘーヴァジュラ、サンヴァアラなどで、いわゆる本尊です。

菩薩では観音菩薩に対する信仰が圧倒的で、自分達の国を観音浄土とし、観音の生まれ変わりとしてダライ・ラマを代々敬ってきました。



写6「守護尊」



写7「護法尊」

女神ではターラー女神(菩薩)も人気があります。女神にはダーキニーのように血に飢えて狂暴なものもあります。護法尊は仏法を外から守る役目を持っており、忿怒の形相で描かれています(写-7)。代表的なものにマハーカラがあります。日本でも仏や観音を加えた三尊が祀られ、四天王、一二神将、不動尊などがやはり忿怒の形相で仏法を保護しております。寺院の入口には必ず六道輪廻図が描かれています。六道輪廻とは、人は地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天の世界を生まれ変わることで、日本にも浄土思想と共に入ってきました。

チベットのシンボルと言えばポタラ宮です(写-8)。町のどこからも見えるマルポリの丘



写8「ポタラ宮」

にそびえる「観音菩薩の住む山」を意味するポタラ宮は、17世紀中頃から20世紀中頃まで300年にわたってチベットを支配した法王ダライ・ラマの宮殿として建てられました。13階建てで、中には1000以上の部屋があると言われています。ここを見学するのは、薄い空気になれてきても大変です。観光客はダライ・ラマの居室、立体曼陀羅の部屋、歴代のダライ・ラマの供養塔、諸仏の部屋など上がったり、下ったりしながら一定のルートに従って見学します。このルートをはずれると迷子になり戻れなくなります。ポタラ宮の屋上はラサの町を一望でき苦しくても見る価値は十分です。現在の主(ダライ・ラマ14世)のいないポタラ宮はなぜか寂しげです。

次にラサの中心にあるチベット仏教の総本山、大昭寺(ジョカン)へ行きます(写-9、10)。この寺院は7世紀にチベットを統一した初代ソンツェン・ガンポ王の2人の妃、ネパールの王



写9「大昭寺入口」



写10「大昭寺内部」

女と唐の王女が、王の死後菩提供養のために建立したと言われています。驚くことにチベット人は各地域より、数カ月から数年かけて、徒歩や五体投地をしながらここまで巡礼にきます。それでは私達もチベット人と一緒に五体投地をしてお参りしましょう。入口には巨大なマニ車があり、このマニ車の中には観音菩薩の経文が入っており、これを一回まわすとこの経文を一回唱えたこととなります。内部は暗く懐中電灯が必要です。ツォンカパ像や8大弟子の像、阿弥陀仏などが安置された小さな部屋を沢山の参拝者の中に混じり見学します。チベットでは供物としてバターの灯明を灯し、カターと呼ばれる薄い白布（古来の風習で、相手の幸福を祈るときに相手の首に掛ける）を仏像に掛けます。各部屋はまさに満員電車状態で、チベット人の臭い（地方の人々は風呂に入る習慣がなく、洗濯もしない）とバターの灯明の臭いで気分はまさに阿弥陀浄土です。お参りの後は大昭寺を一周する仲見世の八角街（パルコル）へ行きます。ここを五体投地しながら巡礼する人もいます。ここには日用品、食料品、装飾品、骨董品、外

国製品を扱うお店が集まってとてもにぎわっています。

これからラサを離れて、古代チベット王国吐蕃の故地ヤルルン渓谷のツェタンまで小旅行をしたいと思います。ヤルツァンボ河に沿ってラサから200kmほどですが途中、崖崩れで道がなくなり、8時間もかかってしまいました。ヤルツァンボ河には橋がほとんどなく、対岸に渡るには珍しいヤクの皮で出来た舟を使い、軽いで2人でどこへでも運べます。途中タントク寺を見学していきます。ここの仏堂にはなんと3万個の真珠で作られた美しい観音のタンカ（仏画）があるからです（写-11）。ユムブラガン



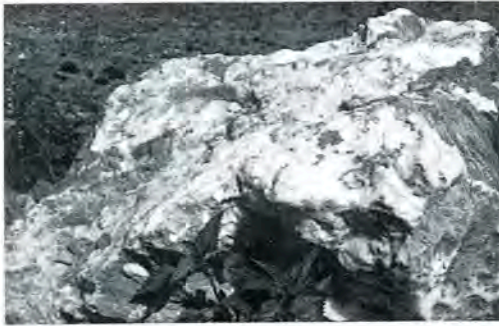
写11「タントク寺タンカ」

は吐蕃時代のチベットで一番古い遺構で小高い絶壁の丘の上に建っています（写-12）。ここ



写12「ユムブラガン」

も徒歩で丘の上まで山道を歩かなければならぬのでまさに苦行です。ガイドの説明では山道には感電草と呼ばれるとても危険な雑草が生えているので絶対に触らないよう注意がありましたが、とても興味があつたので触って見たらまさに感電したように電気が走り、半日ずきずきしていました（写-13）。刺があるわけではな



写13「感電草」

いのですが、不思議な雑草で要注意です。ユムブラガンからの眺めはラサと違い青い麦畑が広がり、土地が肥沃なことがわかります。ツェタン
の町から28kmほどの所に蔵王墓があります。
ここはソンツェンガンボ王を初めとする歴代の
王の古墳が集まっている聖地で、まるで奈良の
明日香村を思わせます。

チベットは現在民族独立で中国政府と対立しています。その先鋒は僧侶です。ダライ・ラマ14世がインドに亡命してから40年以上経ちますが、至る所でチベット人の心の拠り所となっていることがわかります。現在もダライ・ラマ14世を慕って、ヒマラヤを越えてインドのダライ・ラマ14世が住むダラム・サラに亡命する人が後を絶ちません。ラサには沢山の漢民族が暮らしていますが、観光客の我々にもチベット人に対する差別が感じられます。チベットはラサを別にすれば物質文明とは対局にあります。しかし世界で一番青い空と、タシデレ（こんにちは）と声を掛ければはにかんだ笑顔でタシデレと返ってくる、素朴さ、そして高山病で苦しんでる私に、リンゴをくれた少年僧の輝く瞳を持っています。ラサは天空の聖地でした。

次回は西チベットのお話をしたいと思います。

